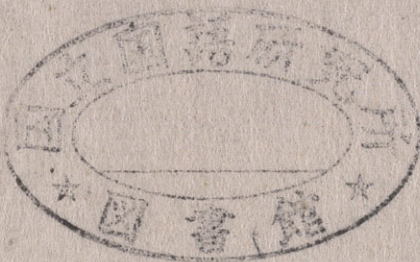


詞
通
路

上

W
M
1002



淡江大學圖書館

國立國語研究所



1002261640

詞のかよひ路序

世ふ何事や。何事や。人のもて何そふねと。ちあふ
人の心を樂くまめさふも。ちあふねと。あふねと。
今れや。それの中ふ歌よむも。ちあふねと。物より
ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。
ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。
ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。
ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。
ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。
ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。ちあふねと。



めて。おむのしきと与後しやもいふむふ。わあ
ろななくさうて。樂しきおもふるにさなり。
わくふち古事記の本記ふるて。神世上古
此哥のもやうむひなれや。今此世とて
あらまゝなあるを。そく

藤原奈良の法代を經て。寛平延喜のころを
ひよる。大やけわさーいよくはありふみした

もて阿そひくさとあがりて。花お葉も虫のゆる音
おあけ。月雪霞のをとふしふもよあされ。高き
みしうたみやわがかゝるくさはひとあむをり
もてゆたて。事ひろくあはまゝふ。那ふと人の
題をまうけた。おのゝ身ふあつたらぬ事残も。
そのをとりふしおあきあけこやうをと。恋はまれ
旅ふまれ。海川野山け名やころふよそへこ満

も海こしけあるや城引いて。廿ふひふは
さぬ免つらしたんをやはけえ。あまを
志難く高く起けろおろやふや。来
あひつ。学ひえるひりのほとも。よみゆる力
のきちも。やういふ見えあふれて。そのよき哥を
よれ哥と見えさるめて。同じ学ば友あつてさら
けり。又さらぬよるしふても。こそおもしうや

やとえつ。或も遠たさひふも字ア一都へ
て。もてちやちめるよ。思ひほこるをもみられや。
ひとろちよく樂し可解しやち。あれなむ
やて。上古中昔の人の。ん詞の免てゑたよ。神
も人もんけうとわけむあめーおほえそ。
言靈ちはふ道ひちちる。やうもひあるのりける。
今もあゝも心を種の道なれそ。いめて世よ秀

多きをぞや。心をくつた。思ひをあらして。よき
 のへもむす。於ほろけなるぬきとて形を
 一首あてとよくとみえとむす。かへ
 その樂しとて後ろけめや。また家集もあれ
 何れもれ摺巻も何れはして。世ふひろくなるを
 後と。末の世久しく傳へて。ふ代又とちかぬ
 詞の玉もぞ思ふ。きく。きく。きく。きく。

大あゝの世あゝとさうれぬ人の。哥巻よ都うたれる
あやしもさくらみづらに。梯本朝臣山部宿祢を日本
記せしむるその名あるされさる人々あらはしむ。
萬葉集ふんえり。おむひみした。此二人を神を
も何あむちりのそれた人なれど。あふひまをも
あやもと起さるなり。喜撰法師檜垣姫なども。その歌
あより世あゝすゆくあゝぬ人なくこそ。かくいふも

はしめよう。此道は与れたものかきりをおいて
あるが。今の世の人よいてむ一首やふくやうも。
いさうのも古れ法ふあひあやうあふ昔れ例
ふよあさうむも。いふあひなくちをうたれと
なとあし。詞は玉緒詞の八衢をうひまあひの
ほやふ。いふまてとらうのへーよあきらえさせ
まあしくあむ。そふある人あうくちあれたあ

学此道さありふて。そこかしこよききそひあらはれ
何れらの書やも。やましくふめつゝの形事おなれ
也。もやく鈴屋翁の著しおなれふるも。まめやかよ
教へさうして。さへて物学ふ人のあめふその功よ
なくそおなゆれ。それふつきて後鈴屋翁の八衢
めあふそまめやあなる教あき。わめやもあし
れちあくも形ちあふに書ちりといへた。さうい此あら

せむ。詞の通路を多家の教いちる。まめくしを
書あり。此道亦深くつら。くはく。阿きうふはれ
ちあり。かくもえきとけまうくむ。

文政十一年戊子秋

本居大平

[illegible]

[illegible]

あはれふにわが歌はもてなむとてさきへしとていふはけしき
さきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへし
あはれふにわが歌はもてなむとてさきへしとていふはけしき
さきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへし
あはれふにわが歌はもてなむとてさきへしとていふはけしき
さきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへし

詞の自他の事

歌はもてなむとてさきへしとていふはけしき
さきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへし
あはれふにわが歌はもてなむとてさきへしとていふはけしき
さきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへし
あはれふにわが歌はもてなむとてさきへしとていふはけしき
さきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへしとてさきへし

かちつけるをわしはふいふに用ひきつゝはつてはれ
 を事くしゝもつれも自他混雜して何ものいふをある父
 之をいけれなむとふ思ひまゝさむとわきまなくおゝき事
 かりきりいけとふきとふもくわくふと後つのこと
 とはくいひとつとあるいふはつとふとゆとくつと
 といふと其の人の自他の相をたゞ煙をたゞきつといふをわつと
 きつとつとひきつといふ人のつと事をつひすゝ花の
 ちつといふとおつとちつとちつとつとつとせなやめ
 ちつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 事といふひききつとつと事といふとつとつとつとつと

力變

とあるは加行変格のくくくき詞なり條の行くくとくが是

○うゝひち上

○五

		四力	四力	四力	
		あうぞく	ううぞく	おうぞく	
四力	四力	下力	四力	四力	下ア
あうぞく	あせぐ	あうぞく	ううぞく	おうぞく	う
下力	下力	下力			下力
あうぞく	あせぐ	あうぞく			う
	下力	下力		下力	下力
	あせぐ	あうぞく		おうぞく	う
下力	下力	下力		下力	下力
あうぞく	あせぐ	あうぞく		おうぞく	う

あうぞく
あせぐ

あうぞく

あうぞく

あうぞく

あうぞく

あうぞく

廿

や
う
う
う

廿

や
う
う
う

	四 廿			下 力		下 力	中 力	中 力	
	ふ う う う			ふ う う う		ふ う う う	ふ う う う	あ う う う	
	下 廿		四 廿	四 廿	下 力	四 力	四 廿	四 廿	一 力
	ふ う う う		こ う う う	う う う う	さ う う う う	ふ う う う	さ う う う	あ う う う	き う う う
下 廿		四 廿							下 廿
ふ う う う う		つ う う う							き う う う う
	下 廿		下 廿	下 廿	下 廿	下 廿	下 廿	下 廿	下 廿
	ふ う う う う		こ う う う う	う う う う う	さ う う う う う	ふ う う う う	さ う う う う	あ う う う う	き う う う う
				下 ラ			下 ラ		下 ラ
				う う う う う			さ う う う う う		き う う う う
下 ラ	下 ラ	下 ラ	下 ラ	下 ラ	下 ラ	下 ラ		下 ラ	
ふ う う う う う	ふ う う う う	つ う う う う	こ う う う う	う う う う う	さ う う う う う	ふ う う う う		あ う う う う	

○うゝひち上

○六

一ナ		下タ		中タ		四タ			下サ
う		いづ		おづ		なづ			や
下サ	下タ	四サ	中タ	四サ	四タ	下タ	四タ	変サ	
う	なづ	いづ	おづ	なづ	うづ	なづ	うづ	や	
	下サ	下サ	下サ		下サ	下サ	下サ	下サ	下サ
	なづ	いづ	おづ		なづ	うづ	や	や	
		下ラ			下ラ	下ラ		下ラ	
		いづ			おづ	なづ		や	
	下ラ	下ラ	下ラ	下ラ	下ラ		下ラ	下ラ	
	なづ	いづ	おづ	おづ	うづ		うづ	や	

中ハ	中ノ	四ハ		四ハ			変ナ	下ナ	
ろろろ	ろろ	ろろ		ろろ			ろろ	ろろ	
四ナ	四ナ	四ナ	四ハ	下ハ	四ハ	四ハ			下ナ
ろろろ	ろろ	ろろ	ろろ	ろろ	ろろ	ろろ			ろろ
			下ハ						
			ろろ						
下ナ				下ナ	下ナ		下ナ	下ナ	下ナ
ろろろ				ろろ	ろろ		ろろ	ろろ	ろろ
		下ラ	下ラ	下ラ	下ラ	下ラ		下ラ	下ラ
		ろろ	ろろ	ろろ	ろろ	ろろ		ろろ	ろろ
下ラ		下ラ	下ラ	下ラ	下ラ	下ラ			下ラ
ろろろ		ろろ	ろろ	ろろ	ろろ	ろろ			ろろ

〇ううひち上

〇七

一ヤ			下マ		四マ	四マ			
あひぢ			さぢ		さぢ	くぢ			
四サ	一ヤ	下マ	四サ	中マ	下マ	下マ	四マ	下ハ	下ハ
あひぢ	い	さぢ	さぢ	うぢ	さぢ	くぢ	い	さぢ	かぢ
	下サ	下サ	下サ	下サ	下サ	下サ	下サ	下サ	下サ
	い	さぢ	さぢ	う	さぢ	く	い	さぢ	か
				下ラ	下ラ	下ラ	下ラ	下ラ	下ラ
				う	さぢ	く	い	さぢ	か
下ラ	下ラ	下ラ	下ラ	下ラ	下ラ	下ラ	下ラ		下ラ
あひぢ	い	さぢ	さぢ	う	さぢ	く	い		か

中ハ

ろろぢ

四サ

ろろぢ

下サ

ろろぢ

下

ろろぢ

中ラ	中ラ	中ラ						下ヤ	下ヤ
申	ふ	あ						ん	き
四廿	四廿	四廿	四ラ	四ラ	四ラ	四ラ	四ラ	一	四カ
申	ふ	あ	し	き	き	う	あ	ん	き
			四ハ	四廿	下カ	四廿	下カ	下廿	下廿
			し	き	き	う	あ	ん	き
		下廿		下廿					下廿
		あ		き					き
							下ラ	下ラ	下ラ
							ん	き	き
下ラ	下ラ	下ラ		下ラ	下ラ		下ラ	下ラ	下ラ
あ	ふ	あ		き	き		あ	ん	き

中ラ
申

四サ
申

下ラ
申

牙一版		下ラ		下ラ
		き		き
牙二版	下ワ	四ラ	下ラ	四ラ
	う	き	き	き
牙三版				
牙四版	下サ	下サ	下サ	下サ
	う	き	き	き
牙五版		下ラ	下ラ	下ラ
		き	き	き
牙六版		下ラ	下ラ	下ラ
		き	き	き

牙一版牙二版を四種のうき入よりてすゝまなり
 牙三版をわかく佐行下二版のうきなれといふなり
 うきおれうきとやうなり牙四版を佐行下二版のうき
 なれり牙五版牙六版を佐行下二版のうきとすゝまの
 うきとすゝまなり

○うきひち上

ちよ挙る。句のうち才一辰と才二辰といふところへ才三辰
 と才四辰といふところへさうち法行下二辰は法きくもを
 他は法きくも他は法きくもさうのうもあへて一辰
 毎はさうさうしてふせはつれとあへたりひるな
 ら考へて一才五辰と才六辰も句の法とあへてことあ
 へてさういふなり。さへ才一辰はかへて句の才二辰はかへ
 句の又才二辰はかへて句の才三辰はかへてさういふ
 さういふさういふはさう句といふさういふさういふ
 あへて自他のいふさういふさういふさういふ又句の
 うへさういふさういふさういふさういふさういふ

つなをさくもり身三れきよりうつをさくも。か行の
くもきなれくもよりさくも。と佐行よりうつあむ。麻行の
活なれくもよりあむ。と佐行よりうつさく。身三れきより羅行
よりうつをい。し。さく。身六のきよりうつふ。か。と。か
行の活なれくもよりあむ。と佐行よりうつあむ。と波行の活
なれくもよりあむ。と佐行よりうつむ。と麻行の活なれ
くもよりうつむ。と羅行よりうつむ。とけり。さ。身一
のきより身六のきより佐行と羅行よりうつむ。とまた
る。身一のきよりうつね。い。と。身三れきより身六のきよりう
つむ。と。い。と。さ。又身二れきより身四のきより佐行羅行と。

[illegible]

○同行して自他のもとも例

加行四候活詞

曰下二候活詞

あうそく。

あうそく。

はひらく。

はひらく。

はく。

はく。

めく。

めく。

やうそく。

やうそく。

右となすを物のみにつくはくをいふ句下なすを
はくをいふ句下なす

加行下二候活詞

曰四候活詞

か
に
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

く。く。く。

と。と。と。

ぬ。ぬ。ぬ。

や。や。や。

ふ。ふ。ふ。

く。く。く。

と。と。と。

ぬ。ぬ。ぬ。

や。や。や。

ふ。ふ。ふ。

是をよみたるは二下二股活の方とのおのり
はとより四股活の方とのおのり

佐行四股活詞

下二股活詞

ふ。

ふ。

右とならみつゝはとより下なるものを

まゝをりわこゝろをかり

多行四段活相

日下二段活相

そゝろ。

そゝろ。

たろ。

たろ。

石となゝを物のおろゝゝ物ゝをりわこゝろをかりわなゝを物ゝ

波行四段活相

日下二段活相

たゞふ。

たゞふ。

ちゞふ。

ちゞふ。

つゞふ。

つゞふ。

32

ナ
ニ
ノ

54

な
あ。

右ながしと梅のみのつゝねをとりつね下なふよのと然
ととととりつねなり

波行中二修活句

同上二脈活病

30

30

右よなうにおのづからあつていつかには下なるものゝと
あつてもいつかにふたりでしてくもふのついでに挙げて
まきこはしるがれとほめてたゞこれにてあるはよく
ての例なきをなり

麻行四股活句

曰下二股活句

まゝむ。

まゝむ。

なゆむ。

なゆむ。

なゝむ。

なゝむ。

やむ。

やむ。

ゆゑむ。

ゆゑむ。

右よかゝる物のおけつゝ統をいつさゝと下なるおと

統をいつさゝと下なるおと

四維行四股活句

曰下二股活句

ゝ。

ゝ。

羅行四辰活句

あなう。

いの。

う。

う。

け。

日下二辰活句

あなう。

いの。

う。

う。

う。

右にならぬを始すをり初下なるを他も始せらるゝと
おのつゝ始せらるゝとこひの初なりけ下二辰の活を
らりけそそつゝたてよかるといふ活きさあといふは
是より佐行と羅行の活句をうつて自他の二つを初とあ

そうつさあもようもつてかく加行のたゝもようは佐行羅行
ううつ治けるそえ行の才一れき才五のき才五のきう佐行
羅行よううつ治く事なり外の行ううつとそえきうく
てそえきうきう挙うて細のたのうふ・やとつけういその行
の才一れき才五のき才五のきう佐行羅行よううつ事なり
○加行う佐行よううつて自他のようて例

加行四行活

佐行四行活

うこく。

うらう。

あう。

おう。

か。

かう。

かひく。

く。

かひく。

く。

右にならぬおのつゝ ぬきをつゝこゝろへ下なるを他を流

しゝゝをつゝこゝろへ下なる

加行四段活

依行下二段活

あゝ。

あゝ。

かゝ。

かゝ。

さゝ。

さゝ。

そゝ。

そゝ。

ふせ。

ふせ。

右よなるをこころしくしめすをいふ下なるを他よめす
るをいふこころなり

加行中二辰活

依行四辰活

あゝ。

あゝ。

さゝ。

さゝ。

はゝ。

はゝ。

右よなるをこころしくしめすをいふ下なるを他よめす
るをいふこころなり

加行下二辰活

依行四辰活

あゝ。

あゝ。

子。子。

○加行より羅行よりして自他のこと例

羅行四順法

三

わさる。

三子。

73.

右より左へ読む。すなわち、
おのころは、おのころは、おのころは、

かゝる。

さゝる。

さゝる。

たゝる。

ひる。

うゝる。

さゝる。

さゝる。

たゝる。

ひる。

右よみたるを能くしるゝとて下なるをさかひのつゝ能くしるゝ
しるゝとてしるゝ

○依行より羅行よりつゝて自他のつゝて例

依行四段活

羅行下二段活

ころも。

ころも。

そくちん。

りけ。

ふてなま。

もてん。

ふとあつちをぬきしをいふ詞下なるを他へ移せし。

そりふこしんがし。

○多行より依行よりて自他のより例

多行四候活

依行下二候活

う。

う。

う。

う。

ちよなうとておのつゝゆきとくつりちるふゆとゆきと
りやゆき

○多行より羅行うつて自他のうつて例

多行四股法

羅行下二股法

あやう。

あやう。

か。

う。

こ。

こ。

た。

た。

右よなうとてゆきとくつりちるふゆとゆきと
と他へゆきとくつりちるふゆとゆきと

多行下二股活

あ。つ。

ま。つ。

羅行四股活

あ。つ。

ま。つ。

右よな。な。物。を。ね。す。ま。を。り。つ。つ。下。な。る。ま。お。の。つ。つ。ね。を。り。
り。あ。つ。つ。つ。つ。り

○奈行より羅行よりつて自化のつて例

奈行下二股活

羅行四股活

う。さ。ね。

う。さ。な。

け。つ。ね。

け。つ。な。

右よな。な。物。を。ね。す。ま。を。り。つ。つ。下。な。る。ま。お。の。つ。つ。ね。を。り。

○波行より佐行よりて自他のよりて倒

佐行四條活

之

五
之
以

かき

王

● 〇

○うゑち上

波行四股活

あふ。

くふ。

たふ。

さふ。

ねふ。

右ト云ふハ、うつゝ然モ、とりし初下なる地ハ然モ、
とりし初下なる地ハ然モ、

波行中二股活

あふ。

佐行下二股活

あふ。

くふ。

たふ。

さふ。

ねふ。

佐行四股活

あふ。

ちん・ん。

不為。

右ノ方ニテハ、あつゝゆゑとて、何ト云ふハ、物とゆへるを
いつぬちり

○波行より羅行よりて自他のよりて例

波行四順浩

羅行下二股活

五



ト
ト
ト

十

中
た
ふ。

[illegible]

かき

かき

2

波行下二股注

五行四象法

か

か。

三

三

○

たつふ。

乃其

三

右 上から左へ
うきすゝをいふ
河下なるを
おのろくを

つふこももなり

○麻行より佐行よりつて自他のつて例

麻行四辰活

佐行四辰活

くろむ。

くろむ。

ぶむ。

ぶむ。

そむ。

そむ。

なやむ。

なやむ。

いけむ。

いけむ。

右となすをあのつて終るつて下なるを括弧する

麻行四吸法

ふむ。

のむ。

うむ。

をむ。

佐行下二吸法

ふむふむ。

のむのむ。

うむうむ。

をむをむ。

右よかへうううう蛇をうううう下なる他へ蛇をうううう

麻行中二吸法

あむ。

佐行四吸法

あむあむ。

右よかへうううう蛇をうううう下なる他へ蛇をうううう

さきとつてこゝろなり

麻行下二候活

さき。

佐行四候活

さき。

右上なるおのつゝさきとつて下なるおと結する
とつて初る

○麻行より羅行よりつて自他のさきと例

麻行四候活

羅行四候活

たむ。

たむ。

右上なるおと結するとつて下なるおのつゝ結する
りてこゝろなり

麻行四候活

うむ。

かむ。

くむ。

ぬむ。

ねむ。

右よみたる他をねむとてしつ病下なる他をねむとてしつこゝろなり

麻行下二候活

あむ。

羅行下二候活

うむ。

かむ。

くむ。

ぬむ。

ねむ。

羅行四候活

あむ。

あまの

١٠٠

٤٠

32

石上なるを物と爲すをいふなりなるをふつと爲す
といふなりなり

○也行より依行よりて自他のことゝ例

也行下履活

佐行罷活

あ

あはれ

い
ろ
ろ

い
か
ん。

つひゆ。

くゆ。

くゆ。

つひや。

くや。

くや。

右にかなはのつうくゆきつうくゆくたつた物をゆき

といふことなり

○羅行より佐行よりつて自他のことなり例

羅行四股活

佐行四股活

くゆ。

くゆ。

ち。

ち。

て。

て。

か。

め。

右よかゝるおのつゝゆゑとてふ下なゝとあゝゆゑとてふ

羅行四段活

か。

つ。

し。

ゆ。

ゆ。

る。

め。

佐行下二段活

か。

つ。

し。

ゆ。

ゆ。

右よみまゝうゝゝ地まゝをりつ病下なまゝ地ゝ地まゝを
るゝをりつ病まゝ

羅行中二版活

佐行四版活

あゝ。

あゝ。

あゝ。

あゝ。

あゝ。

あゝ。

右よみまゝのうゝゝ地まゝをりつ病下なまゝ地ゝ地まゝを
るゝをりつ病まゝ

羅行下二版活

佐行四版活

あゝ。

あゝ。

か
・
け。

三

730

如

○和行よく異行よくて自他のよく例

羅行四侯治

五。

右に上なる地を統するを「上」下なるを「下」と

ソウシキニシテ

○佐行と羅行ナクテ佐行ヨウウツタシモアレナク羅行
ヨウウツタシモアレナク佐行と羅行トナク自他
ノミナレトナク

佐行四辰活

羅行四辰活

カクモ。

カク。

カク。

カク。

カク。

カク。

カク。

カク。

カク。

カク。

右とならぬをゆきまゝとてしつゝなりふおのゝうを
しつゝこゝろなり

依行四股活

あゝゝゝ。
くゝゝゝ。
けゝゝゝ。
あゝゝゝ。
たゝゝゝ。

羅行下二股活

あゝゝゝ。
くゝゝゝ。
けゝゝゝ。
あゝゝゝ。
たゝゝゝ。

右とならぬをゆきまゝとてしつゝなりふおのゝうを
こゝろなり

佐行下二股活

羅行四股活

のさ。

の。

うさ。

う。

右上がら他は極きとて下なるをうつて極き
とて下なるはう此の事なりとてことありとて
右の二つは活の印は中二股の活の印の身二れきちひみ
いりぬとて下二股の活の印の身四のきえけせてねへめえれ
えとてさとのそひて佐行よりつら文字のそひて羅行より
つ活ける事あり一風の活の印はけ候ありこゝ佐行羅行とも
よ下二股の活は二とてたよとて例を挙ぐこゝ上の二つは活

合せてもいゝもゝなり。○中二段の活の身二れ喜下段
の活れ身四の喜れきゝなりたゝたのゝゝふはけゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○中二段の活相は佐文字れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

加行

かゝゝゝゝ

かゝゝゝゝゝゝ

多行

たゝゝゝゝ

たゝゝゝゝゝゝ

波行

はゝゝゝゝ

はゝゝゝゝゝゝ

麻行

あむ。

あむ。

也行

えむ。

えむ。

羅行

ろむ。

ろむ。

右よかふらうらむをいふ下なる他は然らず
をいふことなり

○下二候の活用は佐文字れゝて佐行より例

阿行

行

う。

加行

う。

佐行

う。

多行

う。

奈行

う。

波行

え。

う。

う。

う。

う。

〇う。ひち上

〇二十九

なうふ。

なうふ。

麻行

きうむ。

きうむ。

和行

うい。

うい。

右となつておとほをいふ下なるを他のちよとせしむ
りつこゝとなり

○中二版の活字は羅文字のういて羅行よりうける例

加行

あう。

あう。

あゝ

あゝ

多行

あゝ

あゝ

波行

あゝ

あゝ

麻行

あゝ

あゝ

也行

あゝ

あゝ

羅行

あゝ

あゝ

〇うううう

三十

〇

○下二條の法約は羅文字を以て羅行よりなれる例

阿行

30.

三

加行

た
ま

たゞし。

佐行

3.

子。

多行

ういとおのつうう然せううとをうい何なり

○又加行より也行よりううて自他のううう事たうたあけ
うう何のううう然れは例あうくおううれと未んあうう

加行四行活

也行下二行活

き。

き。

ふうううはを然せうとをうい何なりとあううう然を
うい何なりと

○又同一何なりと清濁よりうて自他のううれと未んた
あけうう何のううてあう例なり

加行下二行活

同活

きんぎょ

○又一の活詞をいふなりなきも自他のことなる大なる
厚くなくさへなり次々あけざるをえて去る

依行下二版活

七

奈行一服活

依行下二股活

う。う。

う。う。

右よなうとあつうとゆとつと下なうと物をゆと

奈行一版活

也行下二版活

う。

う。

右よなうと物をゆとつと下なうとあつうとゆと

波行一版活

佐行下二版活

ひ。

ひ。

右よなうとあつうとゆとつと下なうと他はゆと

とつふこゝをさる

麻行一版活

ん。

也行下二版活

ん。

右よかゝる物を紙をさるゝとつふ下なるはあつゝと紙を
いゝとさるゝ

也行一版活

ん。

也行下二版活

ん。

右よかゝるものを紙をさるゝとつふ下なるは他は紙をさるゝ
とつふと紙をさるゝ

和行一版活

羅行下二版活

奈行ト二版の活詞のね。のま才一のまう。な。と佐行四
版の活詞のめ。う。な。は。活きさ。あ。う。

是ゆ。う。あ。け。る。行。の。詞。も。終。多。い。と。ま。ね。ふ。ま。を
あ。や。う。解。さ。な。さ。う。て。ま。う。又。活。き。さ。な。ま。も。思。ひ。出
る。ま。う。な。ま。に。な。し。て。終。ま。い。る。ま。あ。う。是。も。な。さ。う
ら。て。ま。う。

○又自他をう。う。詞のま。う。て。活。き。さ。こ。ま。か。れ。と。う。ま。な。う
詞。い。れ。う。ま。あ。う。次。よ。出。る。ま。う。て。ま。う。

う。

う。

是。を。加。行。四。版。の。活。詞。と。同。中。二。版。の。活。詞。と。な。う。

あじやけ。

あじやけ。

是も昔は佐行四段の活詞とてかゝるのそとゝゝのゝ
なり

ひつ。

ひつ。

是も多行四段の活詞とて中二段の活詞とて

まのふ。

まのふ。

まのふ。

まのふ。

こも波行四段の活詞とて中二段の活詞とて

さのふ。

さのふ。

こも波行四段の活詞とて下二段の活詞とて

こゝに四股の活ねと下二股の活ねとあり

たゝ。

たゝ。

しゝ。

しゝ。

是ハ羅行四股の活ねと下二股の活ねとあり

かゝ。

かゝ。

ふ。

ふ。

こゝ。

こゝ。

これをも羅行四股の活ねと下二股の活ねとて同となれ

とかゝる ふ こゝとと四股は活ねしつゝさうくんの活ね

ねて後のせよと申してゐるといふうとなり

えゝ。

えゝ。

こゝろ小羅行下二股の活詞をてとてはそゝうゝふれなり

くゝん。

くゝん。

ふゝん。

ふゝん。

こゝろともふ佐行四股の活き柴をてかゝりふゝなり

こゝろともふのこなり

くゝん。

くゝん。

あゝん。

あゝん。

こゝろともふ波行四股の活き柴をてふゝなりなとそゝ

ふゝのこなり

おゝん。

おゝん。

おろけ

おろけ

是ハ昔ノ也。行下ニ段ノ活相トモリ。そそくそそく

あーる。

あーる。

こハ昔ノ羅行四段ノ活相トモリ。そそくそそくたふのこ

むさう。

むさう。

是ハ昔ノ羅行下ニ段ノ活相トモリ。そそくそそくたふのこ

かや。

かや。

こハ加行四段ノ活相ト波行四段ノ活相トモリ

む。

む。

是ハ加行四段ノ活相ト波行四段ノ活相トモリ

こ。

こ。

こを佐行四股の活詞と也行下二股の活詞とあり

まうり。

まうり。

こは佐行四股の活詞と罷行四股の活詞となり

まうり。

まうり。

こを佐行下二股の活詞と波行下二股の活詞とあり

まうり。

まうり。

こを波行四股の活詞と也行下二股の活詞とていふなり

八衢波行四股の活詞のまうりといふのは後のりよまうり

といふ例を引ていふことまうりといふ行と活詞とこととていふなり

例を引ていふことまうりといふ例を引ていふことまうり

てふ。

てふ。

こも波行四版の活相と依行四版の活相とをう

の。

の。

こも波行下二版の活相と依行四版の活相とをう

そふ。

そふ。

はふ。

はふ。

やふ。

やふ。

是れを波行四版の活相と羅行四版の活相とをう

の。

の。

こも波行中二版の活相と羅行四版の活相とをう

くろむ。

くろま。

くろむ。

くろま。

くろむ。

くろま。

是亦も麻行下二段の活用と依行四段の活用とあり

くろむ。

くろま。

こも也行中二段の活用と依行四段の活用とあり

くろむ。

くろま。

こい也行中二段の活用と麻行四段の活用とあり

あろむ。

あろま。

こも也行下二段の活用と羅行四段の活用とあり

日のよきなれと風の吹れしをうらやまふに
 くはくはも浪のよきなりとていふは
 をむねとてそ他は花より詞の方なり
 とはいふをむねといひ火つけられぬ
 とむねしてあけしなるはそも毎之
 とは詞とされしは地を花するをいふ
 なりあるあつち花をいふことあり
 花よりそいふことなきを夜の事といふ
 かつち花をいふ詞ありといふ花より
 さてあまた戸をあくるといふあまたの戸

たておきし戸をぬきしむるの月のよき

こころいふ戸のすゝみとあはれとむねのとくさるる夜乃
こころをむねとてこころをあらう

又づゝをわのおつゝをむねとてむねとてわをむねと

をむねとてむねとて書紀武烈のまのこころ阿婆理那のこ

あゝあゝつなをあらうとすれとてさなう又あゝの月を待

かつゝな みるねとてあらうや君あさむきとて

あゝこころとてあらうとてさなとてさなとてさなとて

金葉集よ早斐國うらのあらうとてさなとてさなとてさなとて

これき中とてさなとてさなとてさなとてさなとてさなとて

よゝ ちのふれとてさなとてさなとてさなとてさなとてさなとて

おいそやうやうとあるを伯母のうゝをおいぬけを尾羽の
方においづるをちうくくをいぬけをいぬけ
又身をうきまねをいぬけうきまねをいぬけ
とあるをちうくくをいぬけをいぬけをいぬけ
いぬけをいぬけをいぬけをいぬけをいぬけ
ゆへにきくぬけをいぬけをいぬけをいぬけ
又又又とあるをいぬけをいぬけをいぬけ
とあるをいぬけをいぬけをいぬけをいぬけ
あゝとあるをいぬけをいぬけをいぬけをいぬけ
ふくきをいぬけをいぬけをいぬけをいぬけ

なぐりしといふに考へ

又ゆゑにその物のかつゝの端をいつか切つたをその物を
とつて切なるを切ひぬ。また鏡切ひをまた鏡なるといふこと
もその切なるも切ひぬ。けいゝゝゝゝも切あるけいゝゝゝゝ
それ又切れてゐる切の端は切のまゝにあるを切ひぬ。かゝ
くゝゝゝゝゝゝ

又右今集よ世間ふおろしき世間ふおろしき世間ふおろしき
の名をやらねばなむ源氏夕暮世ふおろしき世間ふおろしき
まゝにせよきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

まなむと文字をてていふたをたてまゝにいふも、いふまゝに

よなぢなむとていふは、一本もまゝとて又伊賀集よ人も
てぬ尾ふち袖よもむつてていふあつたるをまゝなむ
とては文字をてまゝとてよあけいふなまゝとていふ
又あけいふもまゝたのまゝかゝつてあふあけまおの
つゝ袖をいふ袖くゝいふ袖を袖をいふ袖をまゝと
いふとて又る禁ふ山川のへちうてあれと又るまかゝる中ふ
へちうてあふへちうてまおのつゝ袖をいふ袖なれとめ
とていふまゝとていふけれとていふまゝとていふまゝとて
る禁よちもやふまをまゝもけ麻都呂信奴ひとまゝと
とあふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝと

又今世人の奇小虎風な系
ふきなひく
ふきちる
吹れて

なまよめと自他混雜しては其のま申をふくも荒風
 草のちり下りてうろたへてなまよめなまよめな
 とはまよめをなまよめおのろけなまよめをなまよめ
 たりけなまよめ

又病なふ おきそふ おきそふ なあ あふそふ お病のふ
ううそふ そふ お病をそふ そふ お病をそふ そふ
たふ お病おきそふ 秋のうう せ お病おきそふ そふ おきそふ
ゆふ なあ 秋の初風が病をおきそふ しゆ 秋うつゆをおき
そふ なあ かいつそ風病をふの病をふそふ 海よいひなせ

みゝもあつゝ種をなれと自他混雜しつかたふある
なりくわきさうに〓ゆきみはら〓といふことと四候のようになら

こゝ紫ふてみゝとととととわひまうしる



Handwritten text in a narrow column on the right edge of the page, possibly a marginal note or a list of names. The text is written in a cursive script and is partially obscured by the binding of the book.

